

Sport  
Godzilla®

# スポーツ ゴジラ®

第 47 号

特集  
スポーツ  
お薦めの  
一冊！  
一本！

無料



1964 TOKYO  
大会の  
記念特刊

スポーツくじ

toto  
FOR ALL SPORTS OF JAPAN

BIG

スポーツ振興くじ助成事業

「ゴジラ」は東宝株式会社の登録商標です。  
『スポーツゴジラ』は、日本スポーツ学会が  
商標使用の許諾を受け、スポーツネット  
ワークジャパンが発行しています。

2 第47号を発刊するにあたり

長田 渚左

■特集■

スポーツ お薦めの一本! 一冊!

- |                        |              |                         |             |
|------------------------|--------------|-------------------------|-------------|
| 4 赤い手                  | —— (選者)木村元彦  | 24 のこった                 | —— (選者)木村元彦 |
| 6 争うは本意ならねど            | —— (選者)波多野圭吾 | 26 遥かなるセントラルパーク         | —— (選者)阿部雄輔 |
| 8 オリンピックの身代金           | —— (選者)長田渚左  | 28 補欠選手はなぜ金メダルを取れたのか    | —— (選者)江川卓美 |
| 10 君の涙ドナウに流れ ハンガリー1956 | —— (選者)木村元彦  | 30 マイケル・ジョーダントウザマックス    | —— (選者)長田渚左 |
| 12 サッカーが勝ち取った自由        | —— (選者)木村元彦  | 32 弓と禅                  | —— (選者)鈴木希人 |
| 14 スポーツゴジラ第37号         | —— (選者)西本祥子  | 34 ラッシュ/プライドと友情         | —— (選者)山内亮治 |
| 16 図解 世界のサッカー愛称のひみつ    | —— (選者)波多野圭吾 | 36 大リーグ二階席<br>サッカー茶柱観測所 | —— (選者)南伸坊  |
| 18 1976年のアントニオ猪木       | —— (選者)阿部雄輔  | 38 けんかえれじい<br>老人と海      | —— (選者)玉木正之 |
| 22 28年目のハーフタイム         | —— (選者)山内亮治  |                         |             |

47 夢劇場『馬』No.20「美声の奇跡」

長田 渚左

48 バックナンバーのご案内

【表紙イラスト】南伸坊

スポーツネットワークジャパンHP <http://sportsnetworkjapan.com/>

『スポーツゴジラ』は、種目を問わずスポーツそのものの魅力や  
価値を語るスポーツ総合誌（フリーペーパー）です。

## 第47号を発刊するにあたり

編集長 長田 渚左



皆様、いかがお過ごしでしょうか。

新型コロナウイルス感染拡大にともなう外出自粛、三つの密を避けるために、私たち編集部も取材を自粛し、講演会の開催なども控えております。そこでこの状況を逆手にとった「特集」を企画しました。スポーツを心から愛する10人の選者が、それぞれの思いを込めて推薦したい本とDVDを計19本集めました。

実はそれぞれの推薦作品が届くまで、重複するのではないかと心配しましたが、一人一人の嗜好や興味は多岐にわたり、同じ作品はありませんでした。

編集部を代表して推薦作品のほとんどを拝読、拝見させていただきましたが、刊行当時の社会情勢や宣伝効果などはさておき、それぞれが選者の血肉と

なってきたことをうかがわせました。

常日ごろから読書の時間やDVDや映画を鑑賞する時間は大切にしておりますが、「スポーツ」というくくりの中で、これほど多ジャンルの作品を集められたことは予想を超えておりました。

立ち止まらざるを得ない日常を抱えてしまった今、歩みを止めてじっくり思考することの重要性をこれまで以上に感じています。

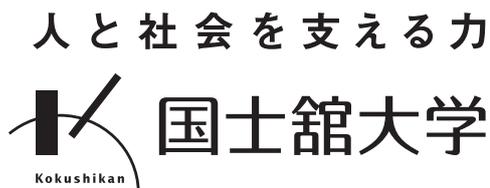
そして今回、スポーツゴジラ初の企画となった「スポーツお薦めの一本！一冊！」は、これからも是非シリーズ化していきたいと考えています。

世界中の人々がさまざまな不安をぬぐい切れず、東京オリンピック・パラリンピックの延期開催も確かなものではないように思います。

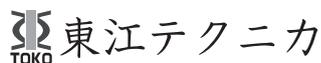
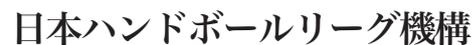
ですが、どんな時代でも、人は発想、発見、想像、思考を止めることなく、生き抜いてきました。

スポーツゴジラ第47号を友としていただければ幸いです。

ご協賛およびご協力企業・団体



立ちどまらない保険。



(順不同)

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『赤い手』

板東英二著  
(1998年・青山出版社)



推薦者

木村元彦

ある芸人が板東英二をイジるネタで、こんなものがあつた。「板東さん、神戸のテレビ局に自分の出演をねじ込んで来るんですよ。『僕も出して下さい。神戸に1日だけ住んだことがあるんですよ!』って、それ嘘でしょう(笑)」徳島商業のエースとして夏の甲子園大会に出て準優勝、いまだに残る大会奪三振記録(83)を引っ提げて中日に入団、引退後は、大阪、東京でタレントとして活躍をしたプロ野球選手が神戸に1日だけ住んだなどとおかしいと彼も思っているのだろう。しかし後述するが、嘘ではない。

板東は旧満州の間島の生まれ。榎村浩の『間島パルチザンの歌』で知られる間島で母は大きな料亭を経営していた。1945年8月9日、ソ連軍の侵攻が始まると、裕福だった生活は一変する。守つてくれるはずの関東軍は、入植民を見捨てて逃げており、残された人々は収奪や虐殺に晒され、日本内地への凄惨な引揚げを余儀なくされた。『赤い手』にはこれを5歳で経験した板東の記憶が記されている。ソ

連兵は、引つ切り無しに女性を暴行しに来た。ある日は、母を風呂桶の中に隠したその蓋の上で遊ぶように大人たちに言われた。またあるときは、兵士が来たたら、大声で泣けと言われた。「いいか、英坊、お母ちゃんを守るためだぞ」

屋根の無い無蓋車という列車に集団で乗せられて移動をするが、よく止まり、いつ出発するのかわからない。尿意を催すと、女性たちは隠れるものがないので車両の下で用をたすが、そのときに突然動き出した車輪に挟まれて絶命することがしばしばあった。身体が引き裂かれる「ギャア!」という悲鳴を板東は何度も聞いていた。衣服は朽ち果て、誰もが栄養失調となった。絶望しかけた母は二度ほど、板東を中国人に売ろうとしたという。5歳児には何が起こっているのかは、分からない。しかし、母と繋いでいるこの手を離したら、自分(の運命)はとんでもないことになるというカンは働いた。その都度、泣き叫んでは別離を拒んだ。甲子園の取材をし

たときに板東から『大地の子』(山崎豊子原作のテレビドラマ)を見た時、これは自分の話やと思ったものです」と聞いた。博多に辿り着き、母親の故郷神戸に身を寄せるが、すぐに父親が徳島にいるという報が来て、板東俘虜収容所跡の引揚者住宅に入るのである(だから「神戸に1日だけ住んだ」は嘘ではない)。そこでも赤貧生活を強いられた。「僕がいつも愛想良くにこやかなのは、いつも人様から食べ物ももらい受けていたからなのです」(CBCラジオ「板東サンデー」での発言)

セカンドキャリアとして日本アカデミー最優秀助演男優賞を受賞したアスリートは、彼を置いて他にはいないが、そんな人物の悲しみと孤独を知るファンはいつたいどれだけいるだろうか。

引揚者としての森徹(中日)、稲川誠(大洋)、そしてシベリアに4年抑留された水原茂。戦争は多くの野球選手を傷つけているが、その時代を伝える書籍は驚くほど少ない。

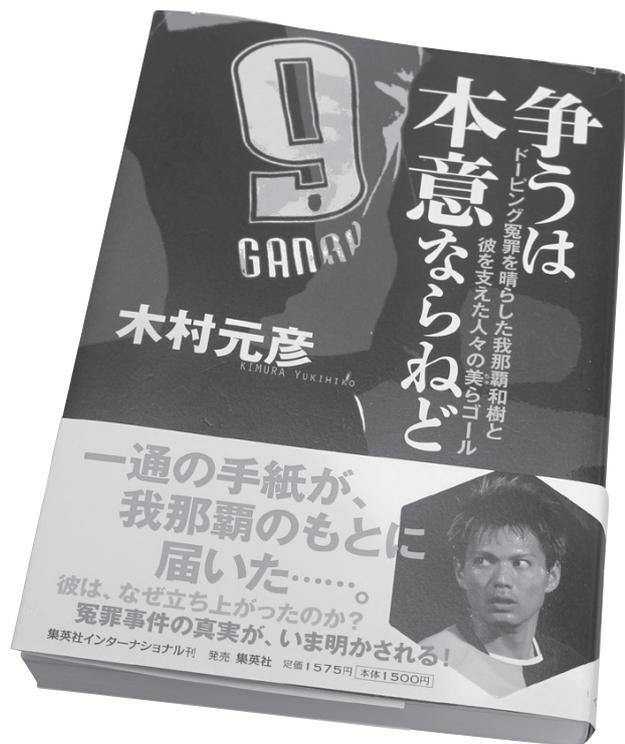
スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『争うは 本意ならねど』

ドーピング冤罪を晴らした我那覇和樹と彼を支えた人々の美らゴール』

木村元彦著

(2011年・集英社インターナショナル)



推薦者

波多野圭吾

事の発端は、2007年4月、風邪による脱水症状を起こしていた川崎フロンターレの選手、我那覇和樹に対してチームドクターが施した点滴治療だった。医師であれば誰もが選ぶありふれた医療行為。ところが、翌日あるメディアは我那覇に直接取材をせず、「我那覇に秘密兵器 にんにく注射でパワー全開」と報じた。「にんにく注射」は健康な肉体にビタミン剤を打つもので、ドーピング規定の禁止行為に含まれる。我那覇に施されたのは正当な医療行為としての点滴であり、報道と事実は全く異なる。しかし、Jリーグはこの誤った報道を鵜呑みにし、我那覇に6試合の出場停止処分を科した。

「公正に選手の立場を守ってくれる競技団体がしっかりとヒアリングしてくれることで、この小さなアクシデントは乗り越えられる」

我那覇はそう信じ、その身をリーグに委ねたが、リーグは報道の真偽を確かめるどころか我那覇に反論の機会すら与えず、頑なに処分を撤回しない。

当時の我那覇は沖縄県出身者として初めて日本代表に選出されるなど、選手として円熟の域に達しつつあった。それが、メディアの誤報をきっかけに調子を落とす、世間から「ドーピング違反者」という負のレッテルまで貼られてしまった。

当事者のフロンターレを除く全30クラブ（当時）のチームドクターたちは、すぐに動いた。我那覇の名誉と、選手が安心して治療を受けられる環境を取り戻すべく、連名で抗議の声を上げたのだ。フロンターレのドクターは規定に反することは何もしていない……、それを証明するためにドクターたちは考えられるだけの手段を講じて処分撤回を訴え続けた。しかし、当時のJリーグは選手やクラブスタッフを守るための組織体制が整っておらず、問題が決着するまでには数多の試練が待ち受けていた。不本意にも自分の愛するJリーグと対峙することになった我那覇は、彼を慕い、信じ、支える人たちの存在を糧に、非情とも思える試練に立ち向かっていく。

「スポーツⅡ私たちにあって良いもの」という思いこみにも近い意識があるからか、スポーツ好きの多くは、協会やチームの活動を疑いの目で見ようとしていない。かくいう私もその一人で、Jリーグや日本サッカー協会の取り組みは革新的で、他の競技団体よりも優れた運営をしていると思っていた。

だが著者の木村元彦は、華やかにショーアップされたトップスポーツの裏にある、人間の危うさや組織の矛盾を付度なくあぶり出す。

本書でJリーグの危機対応と組織体制の甘さを徹底的に糾弾し、日本のスポーツ組織のあり方に警鐘を鳴らすのは、選手がパフォーマンスを存分に発揮し、それを見た観客が歓喜する——そんな当たり前にも思えるスポーツの光景を守るためであろう。

スポーツの魅力を十分に理解しているからこそ、馴れることなく厳しい態度で向き合い、自律的な行動を求める。スポーツを批評することが大切にされる仕事を志すうえで、本書から受けた影響は大きい。

スポーツお薦めの一本!一冊!

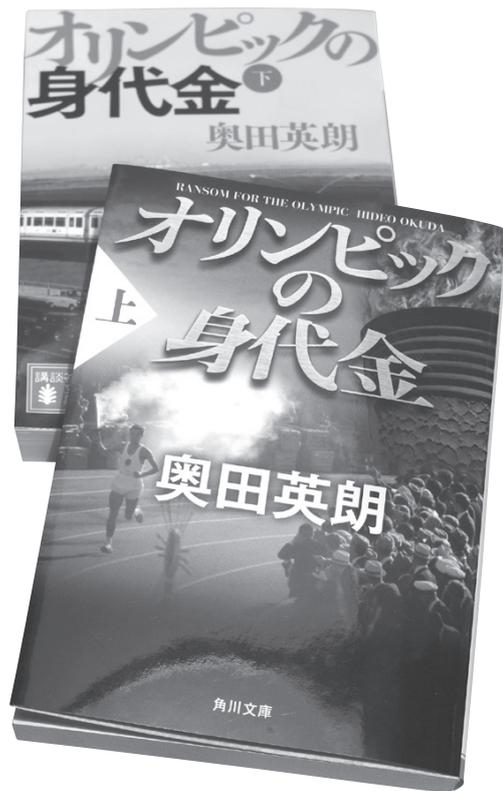
# 『オリンピックの身代金』

奥田英朗著

(2011年・角川文庫

2014年・講談社文庫)

親本は2008年に角川書店より刊行



推薦者

長田渚左

ある時代を後世に伝えるとき、郷愁にとらわれるあまり、不正確な伝承になってしまうことが少なくない。

例えば1964年東京オリンピックは、敗戦から見事に復興した日本の奇跡的な成長のシンボルとして語られる。しかし、当時、その東京でリアルに暮らしていた小学3年生の私には、大人たちがものすごく無理をしていた様子が記憶に強く残っている。

環状七号线を通すために半ば強引に行われた一斉立ち退き。地方から上京して工事現場を渡り歩く人々たち。その子供は何度も転校を余儀なくされた。さらに道路という道路が工事しているため、ほこり以前が見えなくなった毎日……。

そんな異常な光景も学校の先生や親たちは「世界中から人が集まるオリンピックが始まるのだから仕方がない」という言い訳で切り捨てていた。

やがて私がスポーツ界の人を伝える仕事をするようになり、以下のような数字を資料で見つけたとき、

がく然となった。

1964年東京	
地下鉄	10
モノレール	5
新幹線	200
高速道路	50

その後、大学の講義やさまざまなイベントでも、この数字を人に示してきたが、この数字が何であるかを把握している人はまずいなかった。当時の新聞に発表されたオリンピック関係の工事現場での死者数である。1964年へ突き進んだあの頃は、どんな時代だったのか？ そのリアルを片時も忘れずに奥田英朗は『オリンピックの身代金』を書いた。

「東京オリンピックのカイサイをボウガイします」という脅迫文が警察に届く。開催を阻もうとする島崎国男は、東北地方の過疎の農村に生まれ育った。次男の国男は勉強がよくできた。東京大学へ進み、さらに大学院に進学した。

一方、年の離れた長兄の初男は、工事現場の過酷な長時間労働の末に不審な死を遂げる。出稼ぎ労働者だった兄の生と死を見つめるうちに、国男も兄と同じ仕事に就く。以前は書物ばかり読んでいた彼は、生き方を変えるという別れの手紙を大学の恩師に書いた。ノンポリだった国男の気づきと目覚めを感じさせる、気迫と知性に満ちた手紙は著者・奥田の真骨頂。読む人の胸を打つ。

物語は1964年7月13日に始まり、オリンピックの開会式の10月10日をクライマックスにした。

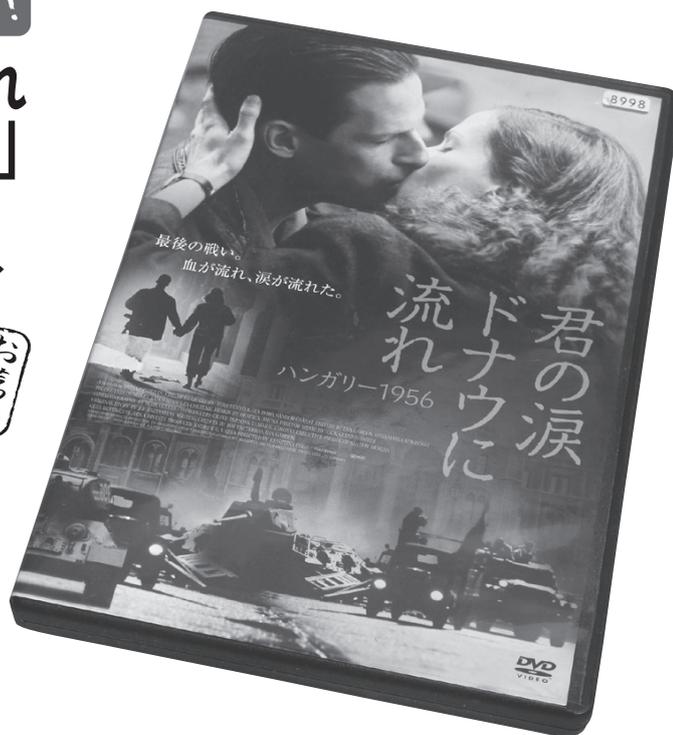
そのわずか3カ月のスピード感に圧倒される。しかし、その間にたびたび起きた爆破は、国家の威信によって一度も公表されなかった。

上・下巻ともに「本作はフィクションで、実在のいかなる組織・個人とも一切関わりないことをここに付記します」とおことわりが入っているが、フィクションではなく、表沙汰にならなかつただけのノンフィクションに思えるのは私だけだろうか……。

スポーツお薦めの一本! 一冊!

## 「君の涙ドナウに流れ ハンガリー1956」

監督=クリスティナ・ゴダ  
主演=イヴァーン・フェニエー、  
カタ・ドボー  
(2007年日本公開)



推薦者

木村元彦

スポーツゴジラの編集長、長田渚左氏の著作『桜色の魂』（集英社）には、1968年に起こったチエコスロバキアの民主化運動「プラハの春」を支持し、ソ連傀儡<sup>かいらい</sup>の共産主義政権からのいかなる弾圧にも屈しなかった女子体操の金メダリスト、ヴェラ・チャスラフスカの美しく気高い生き様が描かれている。本書はそのプラハの春の12年前、同じようにソ連の支配の軛<sup>くびき</sup>に抗<sup>あらが</sup>った1956年の水球のハンガリー代表チームが主人公となる。

東欧の歴史に詳しい方ならばこの年次にピンと来るであろう。そう「ハンガリー動乱」の年である。第二次大戦後、実質的なソ連の支配下にあった東欧衛星諸国の中にあり、最初に民主化に向けて蜂起した国がこのハンガリーであった。同年10月に首都ブダペストでは、学生や労働者がデモを組織し、軍事介入をしてきたソ連戦車部隊との市街戦が展開される。一時は民主化勢力の要求が通り、戒厳令も解除され、10月27日にソ連軍の撤退が決まった。

しかし、それも束の間、11月4日には、突如としてソ連軍が再び侵攻して来た。動乱は圧倒的な軍事力を前に一気に鎮圧され、傀儡政権は再び息を吹き返して弾圧を繰り返し、20万人のハンガリー市民が難民となって国外に流出した。

かように冷徹な政治に翻弄される中で水球代表チームのメンバーは大きな葛藤に苛まれる。何という運命のいたずらか、メルボルン五輪は、動乱の直後、11月22日から開幕であったのだ。こんな政権に利用されるかたちで国家代表として戦えるのか？

主人公のカルチ（イヴァーン・フェニエー）はかつてノンポリの水球選手だったが、デモを指導する女子学生ヴィキと出会い、自由への闘争に目覚めていく。ヴィキは捕えられ、転向を迫られるが、それを拒否してやがて、処刑される。それよりも前、カルチは悩んだ末にメルボルン行きを決める。準決勝で行われた因縁のソ連チームとの試合では乱闘になり、カウチは流血しながらも4対0で勝利を収め、

最後は金メダルを獲得する。

観客のほとんどが、ハンガリーを応援したというこの「メルボルンの流血戦」は同年12月6日に実際にあった出来事であり、カウチのモデルとなったエルヴィン・ザードルが右目の下を切り裂かれている。来日したゴダ監督に取材したことがあるが、彼女は『流血戦』は生まれる前の事件だが、私の世代でも伝説になっている」と語っていた。

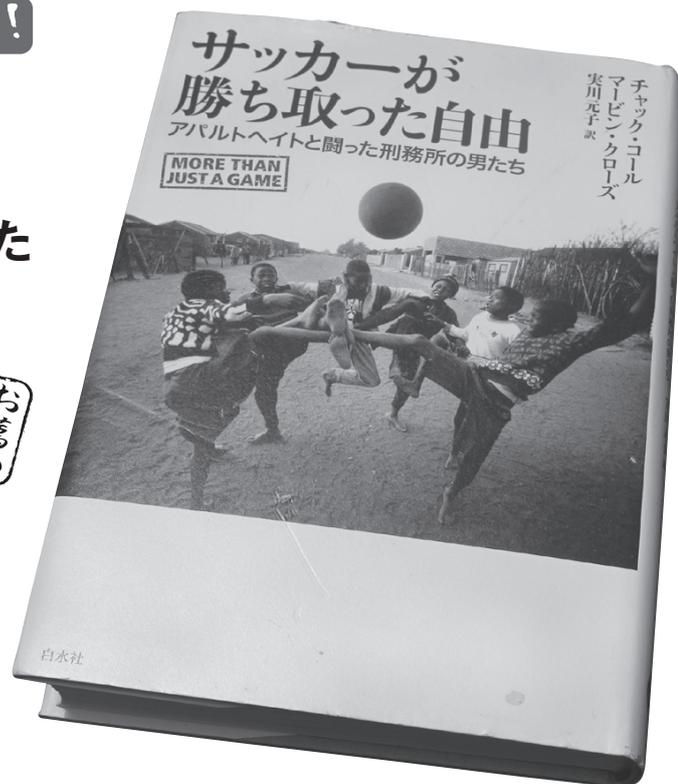
五輪が終わると、ザードルを含む45人の代表選手が西側に亡命した。ザードルは米国に逃れ、米国代表としてミュンヘン五輪で7つの金メダルを獲得するマーク・スピッツを少年時代に指導している。

ときは流れ、民主化組織フィデスは1989年に共産主義政権を倒す。しかし、リーダーだったオルバンは首相になるや、極右独裁を進め、コロナウイルス予防を理由に首相権限を無制限にする法案を通してしまった。ザードルが存命ならこれをどう見るだろうか。

スポーツお薦めの一本!一冊!

# 『サッカーが 勝ち取った自由 アパルトヘイトと闘った 刑務所の男たち』

チャック・コール、  
マービン・クロース著／  
実川元子訳  
(2010年・白水社)



推薦者

木村元彦

「文学は飢えた子どもの前で何ができるか」というサルトルの有名な問いがある。果たしてこの文学を「サッカー」に、飢えた子どもを「絶望的な状況にある人間」に置き換えたなら、どのような回答が出るだろうか。

アパルトヘイトは1948年に法律として制度化され、以降、南アに暮らすすべての人々が白人を頂点として、以下アジア人、有色人種、黒人と公式に4つの階層に分けられた。家族の中でさえ、肌の色によって分断され、当時の南ア政府は、異人種間のセックスを禁止する法律さえ制定した。学校、病院、公園、公衆トイレまでもが白人用と、非白人用に分けられた。人間の尊厳を否定する稀代のこの悪法に対して抗議の活動を行おうとすれば、国中に張り巡らされた秘密警察の密告の網にかかって、逮捕され、家畜のような扱いを受けて投獄された。

中でもロベン島の刑務所は27年間もの獄中生活を余儀なくされたネルソン・マンデラ（後に大統領）

が最初に収監された場所としても知られる。受刑者は日常的な拷問や暴力、虐待にさらされる「悪魔の島」とも呼ばれた。驚いたのは、通常の刑務所であれば政治犯は暴力犯罪や詐欺犯などよりも優遇されるのであるが、ロベン島では最下層に追いやられて、ここでもまた酷い迫害を受けていたという事実である。そんな中でアパルトヘイトと闘った受刑者たちは、希望を捨てずにサッカーに打ち込んだ。この悪法によって南アはFIFAから、国際大会への出場を禁じられていたのであるが、最もサッカーを愛した人々は刑務所の中にいた。

訳者のあとがきには、著者のひとりであるチャック・コールが、後にロベン島ミュージアムの初代館長になる西ケープ大学のオデンダール教授から、その貴重なリーグ戦資料を渡される描写がある。粗末な紙に手書きで記された書類がぎつしりと詰まった箱が70個あまり。それを前にしてオデンダールは言うのだ。「ここに信じられないようなスポーツの歴

史が詰まっている」

——それは受刑者たちが、サッカーをはじめとするスポーツを組織的に実施するために刑務所当局にあてて書いた要求書や、リーグ運営のための会議の報告書など、組織的スポーツ競技の運営にまつわる記録だった。

コールは、後に南アフリカの政財界、もしくは学問の分野で重要な地位につく男たちが、刑務所の中でスポーツを通じて指導力、組織作りの能力や団結力を養ったことを知った。

マンデラをはじめとするANC（アフリカ民族会議）のメンバーは過激派と目されて投獄されていたが、アパルトヘイトが撤廃されると自由の身となり、虹色の国作りに奔走する。今は南アは民主化と貧困差別の撲滅を目指すアフリカ最大の経済国になった。その礎はこのロベン島のサッカーにあったとも言えるだろう。本書を書きのこした著者と訳者に敬意を表したい。

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『スポーツゴジラ 第37号』

特集:モスクワ五輪から  
37年 日本は変わった  
のか』

(2017年・スポーツネットワークジャパン)



※申し訳ありませんが在庫は0です。スポーツゴジラをお読みいただける図書館をP48に記載しました。

推薦者

西本祥子



2017 (平成29) 年10月10日、筑波大学茗荷谷キャンパスで行われた日本スポーツ学会のシンポジウム(「モスクワ五輪ボイコットから37年 日本は変わったのか」スポーツゴジラ第37号に収録)に、笹田弥生さんが登壇された。旧姓・加納。1980(昭和55)年のモスクワ五輪の体操日本代表。同世代として覚えているのは、段違い平行棒でパツパツとバーを軽やかに跳ぶシーンや平均台での安定感抜群の宙返り。強かった。美しかった。全日本選手権では1978年と80年、81年に個人総合優勝、段違い平行棒や床、跳馬、平均台での種目別優勝もあった。モスクワ五輪当時は高校3年生。だが4年後のロサンゼルス五輪は国内の予選で敗れ出場は叶わなかった。五輪代表は日本が出場をボイコットしたモスクワが最初で最後となった。

そのシンポジウムで笹田さんは重要な役割を果たしていた。日本スポーツ学会ではシンポジウムを前にモスクワ五輪日本代表選手にアンケート調査を行

った。全18競技178人の代表選手のうち連絡先がわかるおよそ半数の92名にアンケートを送付し、61名の方から回答を得た。ご自身、「モスクワ代表の皆さんがどうやってボイコットを乗り越えてその後の人生を歩んでこられたのか非常に気になっていました」笹田さんは、中心となってアンケート調査を進め、その結果をこの日のシンポジウムで発表した。

「ボイコットをすべきではなかった」という意見が82%、「ボイコットはあなた自身に影響を与えた」という方が84%もおられた。記述式の回答欄には、「自分たちは五輪代表といっても必ず『幻の』がつく。堂々と代表を名乗って良いのか、自分たちの身分が不安である」という回答が複数あった。モスクワ五輪の日本代表が世界的に見て「オリンピック」なのか、IOCに「オリンピック」として認められているのか、笹田さんも疑問に思っていた。

このアンケートによってモスクワ五輪代表選手の思いが初めて世に出たのではないだろうか。ボイコ

ットから37年経っても8割を超える方々の胸に燦る悔しき、割り切れない思い……。シンポジウムでは登壇してマイクを持った途端に嗚咽し始めた太田章さん（モスクワ五輪ではレスリングフリースタイル82kg級代表。84年ロス五輪、88年ソウル五輪の両大会において同種目90kg級で銀メダルを獲得）の涙が一層、悔しさを聴衆に訴えた。

笹田さんは残念なことに昨年5月に逝去された。「2020年の大会にモスクワ代表選手が何らかのかたちでお手伝いできないか」と検討されていた矢先のことだった。日本スポーツ学会では「モスクワ五輪代表選手の2020年の大会への参加を提案します」という署名を募った。笹田さんたち代表選手の思い、願いが繋がって行くことを祈りたい。スポーツゴジラ第37号は、日本が何故モスクワ五輪をボイコットするに至ったか、そして当時の代表選手たちの思いを慮るには、ふさわしい1冊ではないだろうか。

スポーツお薦めの一本!一冊!

# 『図解 世界のサッカー 愛称のひみつ』

国旗とエンブレムで読み解く』

齊藤健仁著

(2010年・光文社新書)



推薦者

波多野圭吾

サッカーチームに愛称はつきものだ。2018年のロシアワールドカップで優勝したフランス代表の「レ・ブル」や、ブラジル代表の「カナリア軍団」、サッカーの母国イングランド代表の「スリー・ライオンズ」などは、サッカーに関心のある人なら一度は聞いたことがあるだろう。

クラブチームでは、リオネル・メッシが所属するFCバルセロナの「バルサ」、クリスティアーノ・ロナウドがプレーするユヴェントスの「ビアンコネロ」、かつて香川真司が所属したマンチェスター・ユナイテッドの「赤い悪魔」が有名である。

われらが日本代表チームには、日本サッカー協会主導のもと、男子は「SAMURAI BLUE」、女子は「なでしこJAPAN」という公式の愛称がつけられている。実は、こうして協会やクラブが愛称を設定するのはまれで、サッカーチームの愛称のほとんどは、国旗やエンブレム、その土地の動物などにちなんでファンから呼ばれた名が、長い時間を

かけて自然に定着していったものだという。

本書には、そんなサッカーチームの愛称とその由来が、2部構成(第1部・2010年南アフリカワールドカップ出場国を中心とした代表チーム、第2部・世界的な知名度を有するクラブチーム)でまとめられている。もちろん、前掲の代表チームやクラブチームの愛称も記載されているので、ルーツが気になった方はぜひ手に取って読んでもらいたい。

また、一緒に記載されているユニフォームに関するエピソードもおもしろい。

代表チームのユニフォームの多くは、国旗の色とデザインがリンクしている。先にあげたフランス代表であれば、ホームユニフォームとして着用する青のシャツ、白のパンツ、赤のソックスが、国旗に使われる青・白・赤の3色と一致する。

しかし、日本代表は日の丸の赤・白ではなく、青色のシャツをホームユニフォームとして着用する。世界的によく知られる、オランダ代表のオレンジ、

イタリア代表の青も国旗にない色だが、なぜ、これらのチームは国旗と異なる色のユニフォームを着用するのだろうか。

その理由は、国やチームの歴史をさかのぼることで理解できる。日本代表でいえば、1930年、初めて選抜制代表チームが作られた際に東京帝国大学(現東京大学)の選手が多かったことから、同校のユニフォームの色である青が代表チームに採用されたといわれている。

著者の斉藤健仁は、「サッカーにおける愛称は、大きさに言えば、国の複雑な事情や歴史、クラブ誕生の経緯や伝統などが凝縮されたもの」と表現し、愛称を知ることとそのチームを身近に感じ、ファンやサポーターとの交流も深まると述べる。

本書はサッカーチームの愛称をまとめた本だが、愛称を通じてその国の歴史や文化を知ること、開催が延期された五輪・パラリンピックもよりいっそう楽しむことができるだろう。

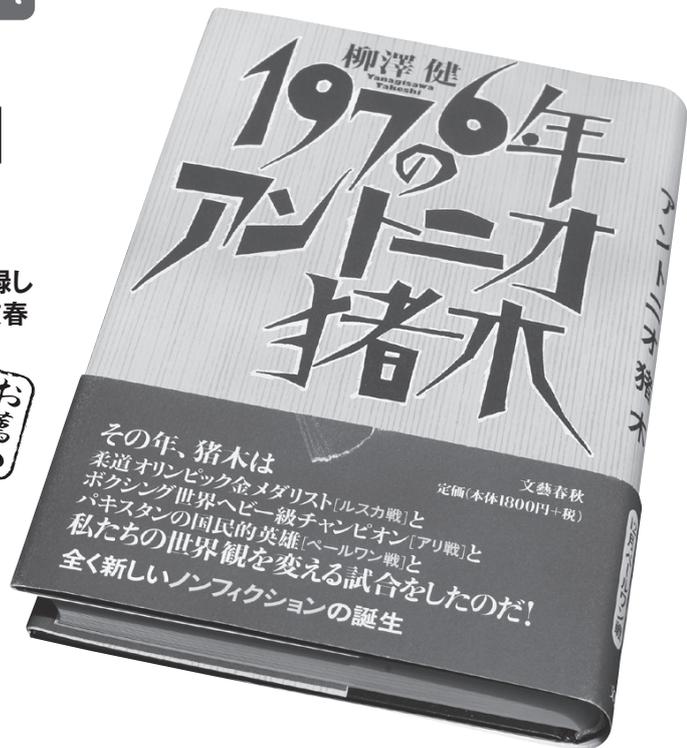
スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『1976年の アントニオ猪木』

柳澤健著

(2007年・文藝春秋)

アントニオ猪木のインタビューを追加収録した『完本 1976年のアントニオ猪木』(文春文庫)として2009年に文庫化



推薦者

阿部雄輔

「ゴジラ」の読者の中にはスポーツに非ざるものとしてプロレスを敬遠している方も多いと思う。ただたとえばスポーツには身体を用いた表現という側面もあると思うのだが、オリンピックやワールドカップという舞台の上で、競技団体や公認機関の定められたルール、ジャッジの下で勝敗や記録を競う競技スポーツのアスリートに比べて、肉体の表現者という意味ではプロレスラーの方がはるかに主体的で自由だと言えなくもあるまい。プロレスに限らず登山でもダンスでも良いが、スポーツと隣接するあるいは境界線にあるジャンルの読書は、親愛なる「ゴジラ」の読者にとっても刺激的な体験になるはずだ。

本書の筆者柳澤健氏と私は20年ほど前、文藝春秋のスポーツ雑誌「ナンバー」編集部同僚だった。「ナンバー」の編集者ならあらゆるスポーツに精通しているだろうと誤解されることも多いのだがそれは買い被りというもので、私自身プロレスや当時チームの頂点にあった総合格闘技についてさして詳しく

くはなかった。だから2001（平成13）年12月の「猪木の惑星」という特集号は別の編集部員4、5名が相談して立てた企画だが、彼らの目次案を見て私はひとつだけ、「アクラム・ペールワン戦の真実」を読んでみたいというリクエストを出した。

1976（昭和51）年12月、アントニオ猪木はパキスタンの国民的英雄といわれたプロレスラー、アクラム・ペールワンと戦った。場所はパキスタン最大の都市カラチのナショナル・スタジアム。日本から同行したのは数人の関係者のみ。アクラムの勝利を待ち望む数万人の地元観客の目の前で猪木はアクラムの腕をへし折り、命からがら生還した——というのが当時私が聞き知っていた話のすべてだった。アクラムがどんなレスラーでどうしてこの試合が組まれたのか、試合そのものも映像は残っているが不鮮明で謎だらけの一戦だった。その後パキスタンに取材して問題の一戦の真実に迫った番組も記事もないはずだ。四半世紀を経た今だからこそ見えること

もあるのではないか……。

しかし問題がひとつあった。当時日本の外務省はパキスタンを渡航危険国・地域の上から2番目のレベルに指定していた。9月11日に米国同時多発テロが起こったばかりだった。テロの首謀者アルカイダはパキスタンの隣国アフガニスタンを拠点とするイスラム主義組織タリバンと友好関係にあり、タリバン自身も同年2月にバーミヤンの石仏遺跡を爆破・破壊するなど過激な活動を展開していた。パキスタン北部にはタリバンの支配地域もあって、真正正銘の危険地域である。フリーランスの記者やカメラマンを派遣するわけにはいかない。

危険地域の取材はフリーランスが自己責任で——が昨今のマスメディアの常套手段のようだが、当時の文藝春秋にはまだ健全な判断をくだせる常識と経済的余裕があったという話だ。とはいえそもそもまさに不要不急の取材のために危険地域に人を送り込むというのだから健全な常識も何もあったものでは

ないが、そんな状況下で現地取材に手を挙げてくれたのが柳澤氏と文藝春秋写真部の橋本篤氏だった。

彼らの記事を書けるために当初用意していたのは10ページだった。よほど取材の手応えがあったのだろう、帰国するなり柳澤氏は、「16ページください」と言ってきた。当時の「ナンバー」でひとつの記事に16ページが割かれるのは大変珍しいが、柳澤氏の記事と橋本氏の写真にはそれに見合うだけの価値が十分すぎるほどあった。

しばらく後、柳澤氏は文藝春秋を退社してフリーランスになり、2007（平成15）年、処女作である本書を上梓する。

1976年、アントニオ猪木はそれまでのプロレスの常識に収まらない4つの試合を戦った。すなわち、

2月6日、東京・日本武道館で72年ミュンヘンオリンピック柔道無差別級・重量級2階級の金メダリスト、オランダのウイリエム・ルスカと。

6月26日、同じく日本武道館でプロボクシング世界ヘビー級チャンピオン、モハメッド・アリと。

10月9日、韓国・大邱で韓国人プロレスラー、パク・ソンナンと。

そして12月12日、パキスタン・カラチでアクラム・ペールワンと。

ルスカ、アリとの2試合は異種格闘技戦であり、アリ戦、パク戦、アクラム戦の3試合は、はじめからそう目論まれていたわけではないがリアルファイトになった。いずれもプロレスの常識から大きく逸脱した試合であるが、1976年のアントニオ猪木はこれらの試合に血路を見出さねばならない状況に追い込まれていた。本書ではまずそこに至る事情が明らかにされ、続いてそれぞれのマッチメイクの詳細、試合そのものが活写される。

柳澤氏の文章は平易な言葉で自ら取材・検証した事実を丁寧に積み重ね、不用意な飛躍や難解な用語、レトリックなどで読者を置いてきばりにすることは

決してない。何百何千と他人様の原稿を読んできたベテラン編集者ならではの達意の文章である。読者は世界や日本のプロレス史や興行の実態、レスリングの技術について、オランダの柔道・格闘技事情や韓国、パキスタンのプロレス事情について知識を蓄えつつ4試合を味わい、その後のプロレス・格闘技界を展望することができる。

事実の積み重ねが基本とはいえ、氏の文章は無味乾燥で温度の低い文章ではない。時に感情があふれ筆が走る。

4 試合のうちモハメッド・アリを除く3人の場合は相手側に猪木との試合を望む事情があり、対戦を申し込んだのも3人の側からだったが、アリが猪木の挑戦を受けた本当の理由は謎である。アメリカではプロレスはワーキングクラスの低レベルな娯楽で、教養や社会的地位のある人間が見るものではないとされている。プロボクサーとプロレスラー、ましてやチャンピオンの中のチャンピオン、ザ・グレイ

テスト”モハメッド・アリとアメリカでは無名の猪木とでは社会的なステイタスが隔たり過ぎていてミスマッチも良いところだ。

610万ドルというファイトマネーはたしかに巨額だったが、実際試合は「世紀の大凡戦」と酷評され、アリは左脚に怪我を負ってその後1週間の入院治療を余儀なくされた。アリにとって生涯の汚点と言っても良い試合だった。

メリットは限りなく少なくリスクのみ大きいプロレスラーとの試合をアリはなぜ嬉々として受けたのか? 2人の交友はその後も続き、98(平成10)年に東京ドームで行われた猪木の引退興行にはパーキンソン病を病んだアリが駆けつけている。

一連のアリの不可解な心理について柳澤流の解釈が綴られるのが単行本の160ページと258ページ(文庫本では164ページと260ページ)。ここで柳澤氏の筆が躍る。ぜひご自分で読んで確かめて欲しい。

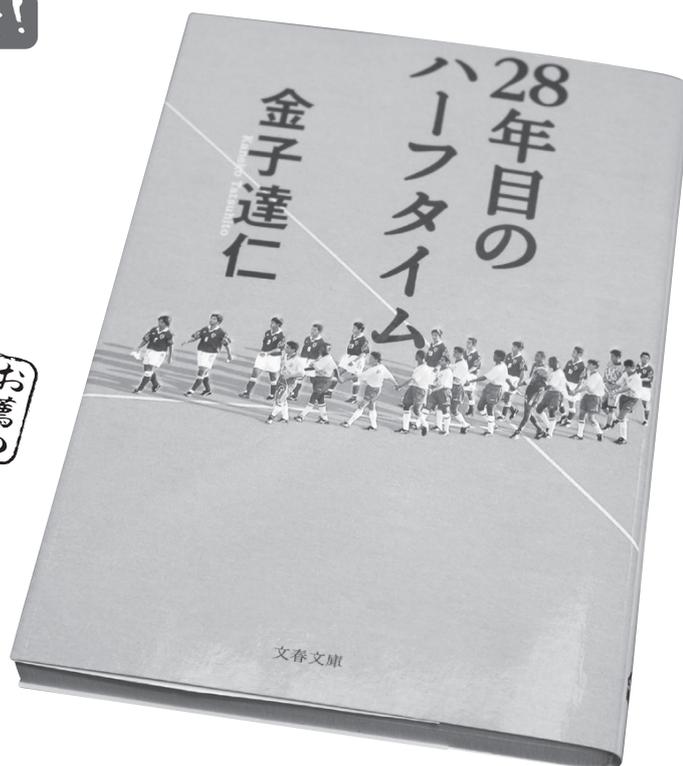
スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『28年目の ハーフタイム』

金子達仁著

(1999年・文春文庫)

親本は1997年に文藝春秋より刊行



推薦者

山内亮治

2019（令和元）年、ラグビーW杯で初のベスト8進出という快挙を果たした日本代表のスローガン「ONE TEAM」。多様な背景を持つ選手が融合していただけでなく、一致団結し大きな結果を手にした彼らは、その言葉が表す通り、一つの美しい集合体に見えた。

過去2度WBCを制した野球、08（平成20）年の北京五輪で金メダルを獲得した女子ソフトボールの日本代表なども結果から見れば、ラグビー同様、うまく一つにまとまった組織だったのかもしれない。

ただ、今回紹介する一冊『28年目のハーフタイム』はそれとは一線を画すものだ。なぜなら、一致団結とは対極、チームの「崩壊」の真相に迫ったスポーツノンフィクションだからである。

同作は、1996（平成8）年アトランタ大会で28年ぶりに五輪出場を果たしたサッカー男子日本代表を描いた物語だ。7月21日、フロリダ州マイアミでの予選リーグ初戦。日本代表は優勝候補筆頭とき

れていた強豪ブラジルに1対0、「マイアミの奇跡」と呼ばれる大金星を挙げる。

世界を沸かす歴史的勝利で同大会での躍進が期待された日本代表だったが、その後、事はうまく運ばなかった。というのも、当時のチームは「一枚岩」からは程遠い集団だったからだ。実際は、監督とサッカー協会、監督と選手、そして選手と選手が対立していたために大きな亀裂を抱え、それによる崩壊を何とか食い止めているという状態だった。そして予選リーグ2戦目（7月23日・同州オーランド）、ナイジェリア戦のハーフタイム。チームにとうとう崩壊の時が訪れてしまう……。

本稿執筆のためにあらためて読み返した。同作を何度読んだか記憶はあやふやだが、それでも最初に読み終えた時の気持ちは不思議と覚えている。知ってはいけないことを知ってしまった——。醜い（と言つて良いだろう）人間関係、その当事者たちから語られる声にたじろぎそうになり、そう思ってしまった。

った。ネタバレしない程度に書くが、そのハーフタイムに起きた出来事とは、監督とある選手との決定的な対立だ。その対立を監督は、「生まれて初めてつてぐらい、キレちゃったんだ」と振り返っている。これにはページをめくる手が完全に止まった。

一方で、代表が抱えた組織の不和にはシンパシーも感じる。例えば学校や職場などの何らかの集団・組織と照らし合わせてみると、私たちは常に幸せでいられたか、誰かを妬んでいなかったかと思うのだ。こう考えると、失礼な言い方かもしれないが「ONE TEAM」となったラグビー日本代表は奇跡的だ。重圧の中で、彼らがアトランタのサッカー日本代表のようにならなかつた保証はどこにもない。表面張力を保っていたグラスに一滴水を注がれたか、そうでなかったかの差くらいなのかもしれない。

『28年目のハーフタイム』を読むと一丸となつて栄光を掴んだチームへの見方が変わる。「本当のところはどうだったんだ」と。

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『のこった』

もう、相撲ファンを引退しない』

星野智幸著

(2017年・ころから)



推薦者

木村元彦

谷崎賞作家による相撲の論考と小説。相撲協会ト  
ップの割腹事件というのが1957年にあった。相  
撲茶屋や升席が利権になっていることが露呈し、批  
判されると、出羽海理事長（元横綱常ノ花）が博物  
館にあった日本刀を用いて蔵前国技館の中で自殺未  
遂を図ったのだ。当時、この件取材した共同通信  
の故村岡博人記者に訊くと、「理事長が問題に向き  
合って検証、謝罪し、解決に動くというのではなく、  
お手盛りなハラキリパフォーマンスで追及を逃れた  
というのが、実際のところですよ。看過してしまっ  
た僕らジャーナリズムの責任もあつて前近代的な風土  
や体質が相撲協会にはその後も残つていった」

残念ながら、部屋内におけるパワハラやモラルハ  
ザードの看過など、相撲協会はガバナンスが問われ  
続けて久しい。そしてまたそんな協会がおざなりに  
して来たことで、土俵の外に表出して来た問題があ  
る。あえてそれを「国技」問題と呼びたい。作家星  
野智幸は、ファンだった貴乃花の引退で一時、相撲

ファンを引退していたが10数年ぶりに国技館に足を運んでみると、そこではヘイトヤジが公然と飛び交っていた。モンゴル力士たちに対して「モンゴルへ帰れ!」というヤジや怒号がぶつけられるのだ。スポーツ紙も同様で「照ノ富士、変化で王手も大ブーイング! モンゴルへ帰れ」と言った見出しが堂堂と踊る。

これは法務省が示す現行のヘイトスピーチ解消法では一発アウトである。Jリーグにおいては禁止されている差別行為が相撲界では野放しになっている。社会における危険な空気を予見して自らの小説に数多く投影して来た星野の嗅覚は、本書では、愛する相撲界の危機を看破して、警鐘を鳴らす。曰く、サッカーでは禁止されている『日本人ファースト』のように危うい価値観をむしろ相撲人気を盛り上げるために利用している」

相撲協会が差別声援をなくす措置を講ずる姿勢を見せていないのは、「相撲は国技だから」である。「国

技だから外国人に冷淡でも仕方ない」と言う理由に星野は明解に反論する。ではサッカーの母国イギリスで活躍する日本人選手がプレーに関係の無い部分で「日本に帰れ」と言われるのは仕方ないのか? と。「国技」で差別を正当化できるはずが無いのだが、そのような議論もせず、先述したハラキリでの免罪が現在に至るまで流通しているように見受けられる。

シンプルが故の奥深さと魅力は、国境を超え、シラクもオシムも相撲を愛した。土俵に多国籍の力士がいることの僥倖。全章に好きな相撲界でいて欲しいという星野の相撲愛が流れる。立ち合いから技の駆け引きに至るディテールを解説する文章は、小林秀雄が「本当の解説」と絶賛した神風正一に読ませたい。

アメリカのプロレスシーンがいかに移民、難民のレスラーの献身によつて更盛を極めていたかを記した『1964年のジャイアント馬場』(柳沢健)との併読を勧めたい。

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『遙かなる セントラルパーク』

トム・マクナブ著／飯島宏訳  
(1986年・文春文庫／2014年同新装版)  
親本は1984年に文藝春秋より刊行



推薦者

阿部雄輔

ロサンジェルズからニューヨークまで約5000 kmを己の足のみで駆ける——かつて実際に行われたアメリカ大陸横断ウルトラマラソンレースに想を得た長篇小説である。

時は1931(昭和6)年。賞金総額36万ドル。道中ローカルスポンサーの賞金が懸る区間もあって、一獲千金を狙って世界中から2000人を超えるランナーが集まった。

スコットランドやニューヨークの失業者、メキシコの寒村を貧困から救うために走る若者、イギリスの貴族もいたし、ドイツからはヒトラーユーゲントの青年たちがやってきた。女性の参加者もいた。アメリカやヨーロッパのプロの長距離ランナーも参加しているが、彼らにとつても一日50マイル(約80 km)、60日以上続くレースは未知の領域だ。

行く手には砂漠やロッキー山脈など自然の難所が待ち構える。それだけでなくレースを快く思わない勢力によるさまざまな妨害が仕掛けられていた。彼

らは無事ニューヨークにたどり着けるのか。優勝賞金15万ドルを手にするのは誰か。次から次へと降りかかる困難と闘う一行とともに読者も一步一步ゴールへと導かれていく。

著者のトム・マクナブは三段跳びの元スコットランド記録保持者で、72年ミュンヘン、76年モントリオール五輪の陸上競技イギリスナショナルチームのコーチをつとめた。未知の領域に挑むランナーの生理、心理面の描写は陸上競技のエキスパートならではの、スポーツ小説としてたしかにディテールに支えられている。

原題は「Flanagan's Run」。フラナガンはレースを企画した興行師の名前で、詐欺すれすれの大風呂敷で資金と選手を集め、この壮大なイベントをやり抜こうと奔走するフラナガンは、ランナーたちと並び本書のもう一方の主人公である。そのほか運営の実務をとりしきる事務方、随行する新聞記者たち、一行の胃袋を支える料理人たちにもスポットライト

が当てられ、レースの経済的な側面への目配りを忘れない大人の小説である。

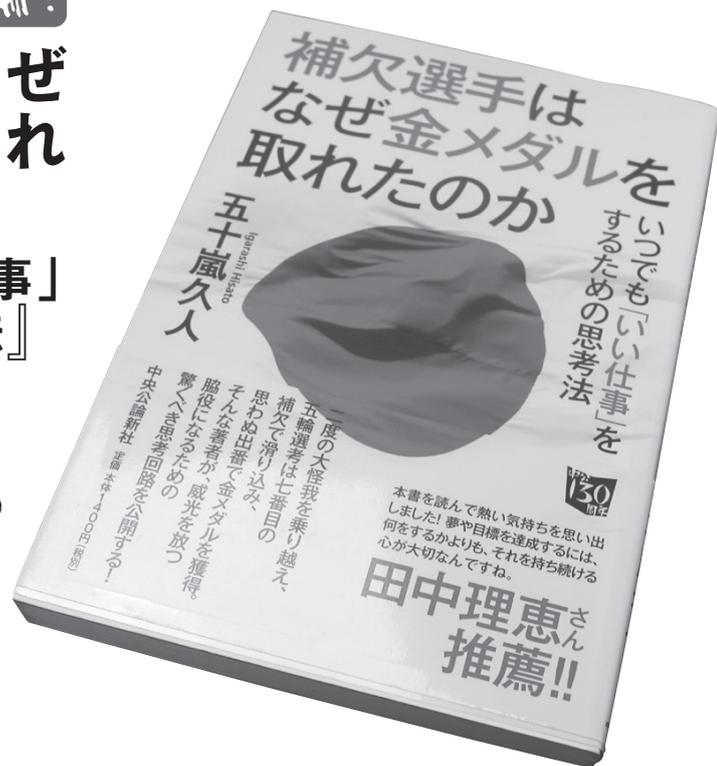
モデルとなった大陸横断レースは実際には1928年（LAからNY）と29年（NYからLA）に行われているが、本作の設定は31年。29年秋に始まった世界大恐慌後、町に失業者があふれ労働争議が頻発していた。横暴をきわめたシカゴマフィアのアル・カポネにFBIの捜査が迫り、ヨーロッパではナチスが台頭してくる。一獲千金を狙うランナーたちの境遇も運営側に立ちはだかる障害も2年前よりよほど深刻さを増している。カポネやフーバー、FBI長官、ブランデー（後のIOC委員長）ら実在の有名人も登場し、マッカーサーやパットンなど後の第二次世界大戦の英雄の名も見える。そもそもフラナガンもランナーたちも金儲けのために走っているのだが、大戦の気配が忍び寄る東の間の平和の中で、それは愛しく尊い営みとして胸に迫る。設定の妙。うまいものだ。

スポーツお薦めの一本!一冊!

# 『補欠選手はなぜ金メダルを取れたのか』

いつでも「いい仕事」  
をするための思考法』

五十嵐久人著  
(2016年・中央公論新社)



推薦者

江川卓美

著者は1951（昭和26）年、栃木県で生まれ、小学校5年生の時に体操を始めます。中学2年生になった1964年、東京オリンピックで体操競技を生で観戦し、「オリンピックに出る」、「世界一になる」と強く心に刻みます。高校、大学と競技を続けますが、決してスポットライトを浴び続けるような選手ではありませんでした。

しかし、二度の大怪我を乗り越え、念願のオリンピック（76年モントリオール大会）体操男子団体の代表選手に辿り着きます。25歳の時です。補欠選手でしたが、チームのエースのアクシデントにより急遽代役出場することになります。何と大会5日前のことでした。著者はその時の心境をこのように述べています。「神は乗り越えられない試練は人には与えない」とはいうものの、「神様もたまには選ぶ人を間違えるのではないだろうか」と。そんな状況に置かれても自分の役割を果たし、金メダルを獲得します。

なぜ著者はそのような想定外の状況の中で、自分の役割を果たすことができたのでしょうか。なぜ神様はそのような試練を著者に与えたのでしょうか。著者だからこそ語ることができるオリンピック秘話には、「えーっ」と思わせるエピソードが次から次へと出てきて、大変読みごたえがあります。そして、先に挙げた二つの謎を解いていくことができると思っています。

また、副題に「いつでも『いい仕事』をするための思考法」とあるように、本書の特徴は単なるスポーツ成功物語ではなく、考える力、創造する力を鍛えるための方法が書かれているところにあります。「いい仕事」といつても、何も社会人の仕事に限ったものではありません、老若男女問わず、今皆さんが各々の立場で担っている役割にも当てはまります。また、本書にはノートに記しておきたくなるような先達の名言が随所に出てきます。著者がかなりの読書家だったことがわかります。著者は、何もそこ

まで自分を卑下しなくてもいいのではないかと思わせるくらい、自分の欠点は「心のひ弱さ」だと言います。おそらく欠点を克服するために、読書を通じて先人の知恵や勇気を得ようとしたのでしょう。その影響からかもしれません、著者は人生を山に譬えて、ライフステージに合わせて、私たちに登り方や下り方をわかりやすく指南してくれます。私は、「なるほど、そういう物の見方があつたのか、そういう考え方もあつたのか」という場面に何度も遭遇し、刺激を受けました。

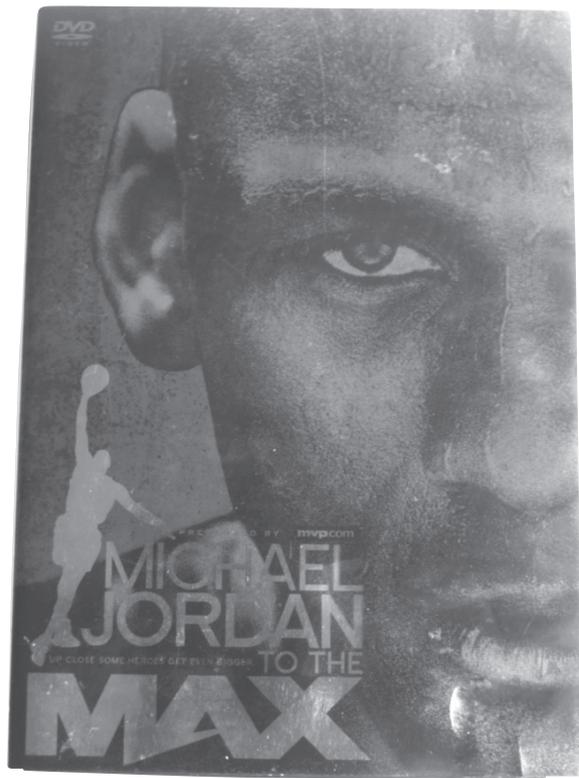
皆さんの中には、山の頂上を目指している人、下途中の人、山へ登ろうかやめようか悩んでいる人など、さまざまな境遇の人がいると思います。皆さんの置かれている状況、自身の考えや経験と照らし合わせて読んでいただけると、新たな発見が見出せるかもしれません。

皆さんが背負っている仕事や役割を一旦背中から降ろして、本書を手にしてみませんか。

スポーツお薦めの一本! 一冊!

## 「マイケル・ジョーダン トゥザマックス」

監督=ドン・ケニプ、  
ジェームズ・D・スターン  
CAST=マイケル・ジョーダン、  
フィル・ジャクソン  
(2000年日本公開)



推薦者

長田渚左

一人のアスリートを扱ったドキュメンタリーでは最高の作品だと思う。

何より嬉しいのは演出、脚本、制作、音楽、効果などを担当する制作側スタッフ一人一人が乗って仕事をしているのが感じられること。そしてマイケル・ジョーダンのことをとても好きな人が作った作品だということもよく分かる。

言わずと知れたバスケットボールの神様ジョーダンだが、1993年に父ジェームスが射殺体で発見された悲劇や高校時代に選抜チームを外されたことなど、すでに知られたネガティブなエピソードを、ジョーダン自身がどう語るか? も聞きどころだ。

さらに彼はバスケットボールを一時引退して野球に転向したことがあった。94年。メジャーリーグのシカゴ・ホワイトソックス傘下のAAチーム「バーミンガム・バロンズ」に入団した。高校時代に野球をやっていたが投手だったので、バッティング経験の少ない彼は、マスコミに嘲笑されながらも、毎日

毎日練習を続けた。

朝、日の出とともに起床し、自ら朝食をつくり、まだ誰もいない道を一人車を走らせて球場に向かう。隣の席に父が座っているかのように感じながら……。

練習熱心だった。一日の練習を終えた後もコーチに特打を志願する。人一倍の努力をしたが結果は出なかった。その一見無駄に思える時間が、彼自身にあらためてバスケットボールの魅力を確認させた。

一つの成功にしがみつき、脇目も振らない生き方もあるだろう。しかし、彼は他人に嗤われようと、名声を捨ててトライした……そのことが私たちに教えてくれることは少なくない。

92年バルセロナ・オリンピックで米国代表『ドリムチーム』のジョーダンを生で観戦した。その存在は他を圧倒していた。人並み外れた身体能力、重みから解き放たれてしまうような空中での動きは、信じ難いものだった。彼を伝える実況アナウンサーは、ジョーダンのジャンプを「TAKE OFF」

(離陸開始) と表現した。個人的には映画には元来少しばかりの嘘を混ぜてほしいという願望があり、映像の中で彼が夜景の中を飛び続けるような錯覚も楽しめる。つまりアスリートはアーティストでもあることを暗黙のうちに伝えている。

また「人を見るときのジョーダンは、いつも同じ目をしている」というナレーションのくだりが忘れがたい。彼はいつも父と子を探し、見ているのだという。父と子を見るところらやましくて仕方がない……そのことも私たちに何かを気づかせてくれる。

ドキュメンタリーであり、スポーツエンターテインメントでもある。コロナ禍で家にいなくてはならない状況でも、気分が明るくなつてファイトも湧く。元々の製作がアイマックス用(巨大スクリーン仕様)なので、家庭用の機材で観ると迫力が半減してしまうのは否めない。

何とかもう一度、アイマックスシアターで観るチャンスはないだろうか……。

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『弓と禅』

オイゲン・ヘリゲル著／  
稲富栄次郎・上田武訳  
(1981年・福村出版)

『新訳 弓と禅』魚住孝至訳(2015年・角川  
ソフィア文庫)も入手可能



推薦者

鈴木希人

この本は1980年代のフリースタイルスキーの  
世界で活躍された角皆つのかいまさと優人氏が書いた『コブ道免許  
皆伝』(1991年・学習研究社)で知った。その  
中の2ページだけスキーテクニクとは全く異質の  
「無の境地」の段があり、そこを読むと今まで見た  
連続写真やビデオの映像がより鮮明に頭に浮かんだ。  
いくら技術と体力があっても気持ちが悪く負けて実力  
が発揮できなければ試合や大会に勝てない。これを  
克服するために角皆氏は武道の心得に触れ、「勝ち  
たいと思う心が負けを呼び、当てたいという願いが  
矢をそらす」弓道の精神を紹介する。

安定した結果を出すために、派手な動きの中で冷  
静であることがいかに大切か、非常に興味深いコメ  
ントが書かれていた。これはスキー以外のスポーツ  
や仕事でも通用する。

もつとコブ斜面の滑りを上達したい一心で角皆氏  
に影響を与えた原本を調べると、ドイツの哲学者オ  
イゲン・ヘリゲルが著した『弓と禅』であることが

判った。

ヘリゲルが実際に日本で学んだ弓道精神について 1936年にベルリンで行った講演の翻訳本で、初訳は『日本の弓術』（柴田治三郎訳・岩波文庫）。

文語的な表現が多かったため口語調に改訳されたものが本書である。難解な表現も残っているが、ドイツ語のズバッとした言い方や論理的な表現はスポーツの解説書のようなシンプルスでもある。

日本人とドイツ人の師弟関係は東洋と西洋の文化の対立とも捉えられ、考え方の相違をいかに克服するかも読み応えがある。日本人師範は外国人が武道の精神を理解することはできないと半ば諦めもあり、無理に上達を求めず待つことは、現代のコーチングやアンガーマネジメントにも役立つ。

ヘリゲルはカント派の哲学者で、1867年パリ万博以降のジャポニズムの影響を受け、哲学を教えることと日本文化を学ぶために来日していた。ピストル射撃経験者のヘリゲルが日本文化を学ぶ手段と

して弓道を選んだのは自然の流れであったのだろう。

しかしながら「単に的を射るのではなく、目的も意図も無い」という、日本人でさえ理解に苦しむ禅問答のような弓道の指導にヘリゲルは大いに悩んだ。2m先の俵に向けた射だけでも師範からダメ出しを3年間も言われ続け一旦は音を上げてしまう。自分では完璧に的を捉えているつもりが、実は全くできていないことに気付き、ヘリゲルは地味な練習を重ね、合計6年間を費やすことで最終的に弓道の精神を理解する。

基本やルーティーンの大切さはトップレベルのアスリートやビジネスマンほど理解しており、イチロイやジョコビッチも禅を取り入れたトレーニングを実践している。

ヘリゲル目線で書かれたこの本は、スキルアップテキストとは異なるが、メンタルトレーニングや壁を克服するため、継続性と本質を捉えるためのヒントが隠されている。

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 「ラッシュ／ プライドと友情」

監督＝ロン・ハワード  
主演＝クリス・ヘムズワース、  
ダニエル・ブリュール  
(2014年日本公開)



推薦者 山内亮治

1つの時代に2つの巨星が生きる時、両者が「ライバル関係」をもつて語られることは避けられない。現在のスポーツシーンで考えると、リオネル・メッシ（アルゼンチン／バルセロナ所属）とクリスティアーノ・ロナウド（ポルトガル／ユベントス所属）をめぐる「どちらが上か」の論争が代表例だろうか。クラブや代表での成績、個人タイトルの獲得数などを基に、2人は比較され続けて久しい。

ただ、こうした優劣をつけようとする論争や報道に「ちよつと待ってくれ」と思うようになっていく。特に、映画「ラッシュ／プライドと友情」を観てからは。

同作は、F1界の2人の伝説、ジェームス・ハント（英国）とニキ・ラウダ（オーストリア）を描いた一本。華やかで奔放なハントと冷静で実利的なラウダ。対照的な2人は若き日のF3時代からしのぎを削り始め、1976（昭和51）年にはF1で世界王者を争うまでになる。

同年、世界王者争いをリードしたのはラウダだった。対するハントは優勝の失格処分などもあり波に乗り切れない。明暗はくつきりと分かれたかと思われた矢先、悲劇がラウダを襲う。8月のドイツGP。悪天候による危険な路面状況を受け、レースの実施が選手間で協議されるのだが、ハントを含む多数の選手が決行を支持。そのレースでラウダはクラッシュし、400°Cを超す炎に1分間も包まれ瀕死の重傷を負ってしまうのだ。生死をさまよったラウダだったが、ハントの活躍をテレビで観ながら壮絶な治療に耐え、42日後のイタリアGPで復帰する。

そのレース前、ハントはドイツGPを決行するべきではなかったと非を認めるが、ラウダはそんなライバルにこう言うてのけるのだ。この映画を語る上で絶対に外せない言葉なので、記しておきたい。「君の勝利を見て生きる闘志がわいた。僕をここに戻したのも君だ」

不在の間、レースをリードしポイントを積み上げ

ていくライバルの活躍は、壮絶な治療、自らを包んだ炎の熱よりも強烈な痛みだったのだろう。この映画は、ライバル同士にしか分かり得ない痛みの存在を教えてくれる。そして、ラウダの言葉が示すように、ライバルという存在は、互いを高め合う上での「神の恵み」と呼べるものでもあるはずだ。こうした要素を考えると、報道で目にする比較論は「薄っぺらくないか?」と思ってしまう。本人たちにしか分からない特別な何かがあるのだとしたら、「どちらが上か」と表面的に優劣を語ることなど恐れ多い。アスリートの人生に自らを投影することはできても、高い次元で競い合うライバル関係にまで明確な想像が及ぶというのは困難なことではないだろうか。しかし、「ラッシュ／プライドと友情」はそんな想像が及びにくい場所へと私たちを導いてくれる良作であると思う。本作を観て、あらためてライバル関係とは何か、思いを馳せてみて欲しい。また、それをめぐる報道についても考えてみて欲しい。

スポーツお薦めの一本!一冊!

## 『大リーグ二階席』

芝山幹郎著  
(2005年・晶文社)

## 『サッカー茶柱 観測所』

えのきどいちろう著  
(2007年・駒草出版)



推薦者

南伸坊

「球辞苑」ていう、野球を題材にした情報バラエティ番組（NHK・BS1）があつて、私は野球にぜんぜん詳しくないのにもかかわらず、この番組を時々見る。

そうして見れば、ずっと釘付けになつて、ずっと熱心に見てしまうのだ。出演者たちはいずれも野球に詳しい熱心な人たちで、その会話がとても楽しい。楽しそうに見えるのじゃなしに、実際楽しいのだ。お互いに野球を見るレベルの高い人同士が、会話することそのものを楽しんでいるらしいのを見て、自分も楽しい。

私は野球に詳しくないのだが、ものすごく大リーグに詳しい人の本の装丁をしたことがある。芝山幹郎さんの『大リーグ二階席』だが、これが読むと面白いのだ。オビの文句はこんなのだ。

「イチローも、デジャジオも、この席からだとても見える。」

「私はときおり二階席から、過去の野球とも交信す

る。少なくとも、交信した気になっている。いつもいつも妄想を放し飼いにできるとはかぎらぬにせよ、これは楽しい。野茂英雄とルイ・ティアンが、イチローとサム・ライスが、松井秀喜とビリー・ウイリアムスがいきなり結びつくのはこんな瞬間だ。」

デイマジオはマリリン・モンローのダンナだった人だくらいにしか知らないのに、ちゃんと面白いから不思議だ。

芝山さんが『シュールレス・ジョー』（文春文庫）の著者W・P・キンセラと、親しく会話してるところなんかを読んでいると、まるでいつもの自分とは違った人格になつてゐるような気がする。

野球に詳しくないのに、私は友人の糸井（重里）さんやえのきど（いちろう）さんに誘われて、ドームに行つたりしたけれど、さすがにいつものように無軌道な冗談ばかり繰り出すのはやめている。ゲームを見ている時は、二人とも真剣だからだ。

えのきどさんは野球ばかりじゃなく、アイス・ホ

ッケーにも、サッカーにもとても詳しい。私は野球だけでなく、サッカーにも詳しくないのだが、えのきどさんの『サッカー茶柱観測所』の装丁もした。サッカーに無知なので「茶柱」に食いついて装丁の図柄は、自分んちの湯呑みに入つた、自分んちのお茶を入れたとこの写真を使った。

この本のオビには「えのきどさんは最高にサッカーを楽しんでるね 原博実（FC東京監督）」と入っている。そして、サッカーのサの字も知らない私が任意のページを開いて、そこを読みだすと、これが「面白い！」のである。

えのきどさんは、どんなことにも、面白い視点を探してきて、面白い話をしてくれる人なだけけれども、それが私の知らないことを題材にして話している時も、同じように面白い。きつと直接会つて話す時はサッカーの話題は避けてるんだと思うけど、本読んでる時は、全く問題ないのである。ものすごく面白い。

スポーツお薦めの一本!一冊!

# 『けんかえれじい』

鈴木隆著

(2005年・岩波現代文庫)

親本は1966年に理論社より刊行  
同年に鈴木清順監督の映画が公開された



推薦者

玉木正之

スポーツが好き。本を読むのも好き。映画を観るのはもつと好き。だからスポーツの本は誰よりも沢山読んでいます。スポーツ映画も誰よりも多く観ていると思う。だからこそ一冊のスポーツ本、一本のスポーツ映画を選ぶのは至難の技。しかし、そんなことを言い出しても始まらない。とにかく心を動かされたスポーツ作品を映画を中心に片っ端から並べてみよう。まずはサッカーから。

サッカー本のイチオシはジョナサン・ウイルソン『孤高の守護神 ゴルキーパー進化論』(白水社)かな。GKという特別な存在を、その誕生から取りあげ、歴史に残る優秀なGKを紹介し、様々な国の国柄まで滲み出させているのは見事だ。沢田啓明『マラカナン悲劇』(新潮社)も面白い。1950年のW杯で地元開催のブラジルが隣国ウルグアイに敗れたことを通してブラジルとブラジル人にとってのサッカーとは何か? を描き出している。

映画なら「ザ・カップ〜夢のアンテナ」が素晴ら

しい。ヒマラヤ山麓の僧院でチベット仏教の修行に励む少年僧たちが、何としてでもフランスW杯のテレビ中継を観ようとする。フランスはチベット独立を支持している国であり、彼らは一計を企て、サッカーを知らない老総長の説得に成功。パラボラアンテナも手に入れ、W杯でフランスの優勝を観ることが出来る。大興奮のあと、静かに読経と黙想の日々に戻る少年僧たちの爽やかな顔。ほんわかとした雰囲気のなかでサッカーの魅力が描かれている。

W杯とは対極にある世界ランク202位のブータンと203位(最下位)の英国領モンセラトが闘った世界最下位を決める試合のドキュメンタリー映画「ジ・アザー・ファイナル」も良い映画だ。2002年日韓W杯決勝と同じ日に行われた試合は4-0でブータンの勝利。しかしカップは半分にして両国に。ニューハーフ選手の活躍など、世界一ではなく、本当のスポーツの魅力を考え直させる作品だ。

第二次大戦中の連合軍捕虜とドイツ・チームとの

試合を描いたジョン・ヒューстон監督、シルヴェスター・スタローン主演の「勝利への脱出」(ペレも出演)や、ヨコハマ・フットボール映画祭(12年)で上映された「二人のエスコバル」も素晴らしい映画だ。コロンビア代表主将のアンドレス・エスコバル(94年W杯で優勝候補とされながらオウンゴールで決勝T進出ならず、帰国後射殺される)と、麻薬組織メデジン・カルテルのボスのパブロ・エスコバル(アンドレスが所属したチームのオーナー)を対照的に取りあげ、サッカーと社会(と裏社会)の関係を描いた素晴らしいドキュメンタリーだった。

サッカーの社会的存在を知るにはヴィットリオ・デ・シーカ監督の名作「自転車泥棒」と「ひまわり」も見落とせない。前者は第二次大戦後のローマで、仕事のために買った自転車を盗まれた父親が、幼い子供を連れてサッカー場の周囲を探し回る。後者は戦時中に美女(ソフィア・ローレン)と結婚した夫(マルチェロ・マストロヤンニ)が、嫉妬したファ

シスト党员によつてソ連との最前線に送られる。そして戦後まで男の求愛を拒み通した妻は、夫の生存情報を得てソ連に赴き、イタリア人ならサッカー場に姿を見せるはずだと夫を探し回る。しかし……。これらの映画はサッカーそのものを描いているわけではない。が、イタリア人とサッカーの関係を知らうえで興味深い。

「新・黄金の七人7×7」は七人の悪党がロンドンの造幣局に忍び込み、偽札ならぬ本物の札を大量に印刷して盗み出す喜劇映画。その大胆な犯行を実行するのがFAカップ決勝戦の日。イギリス全国民が（造幣局の警備員も）サッカーのTV中継に熱中するなか、悪巧みは大成功と思われたが……との筋書も、サッカーと英国社会の関係が伺えて面白い。ラグビー映画なら、マンデラ大統領の下でアパルトヘイトから脱した南アフリカでのW杯を描いた「インビクタス〜負けざる者たち」（クリント・イーストウッド監督）にトドメを刺す。アメリカン・フ

ットボールの映画には、デンゼル・ワシントン主演の「タイタンズを忘れない」やウォーレン・ベイティ監督・主演の「天国から来たチャンピオン」、サンドラ・ブロック主演「しあわせの隠れ場所」など素晴らしいハリウッド映画も多い。が、なかでもアル・パチーノ、キャメロン・ディアスなどが出演した「エニイ・ギブン・サンデー」が見事。オリヴァ・ストーン監督の作品で、黒人の差別問題やスポーツの商業主義の問題点などが、コーチの人生を描くなかに織り込まれている。

フットボール以上に映画や本のテーマとして取りあげられているのが野球だ。ゲイリー・クーパーの映画「打撃王（原題は『プライド・オヴ・ヤンキース』）」は、コロンビア大学出身のエリーートの道ではなく、愛する野球の道を選んだルー・ゲーリッグの実話。ヤンキースの大打者として2130試合連続出場を記録しながら筋萎縮症のために引退。まもなく死去した生涯を描いたこ

の映画は、少年野球の楽しさやメジャーリーグたちの豪放と猥雑さ、ファンの身勝手な心情まで描いたうえで、気高い人格者ゲーリッグの姿を浮き彫りにしている。死期の迫るなかでの引退試合で「私は世界一幸せな男」とファンの前で涙したクーパー演じるゲーリッグの姿は涙なしには観られない。おまけにこの映画にはゲーリッグとともにヤンキースの黄金時代を築いたベーブ・ルース本人が出演。達者な演技を披露しているのも興味深い。

試合中に中断が多い野球は、映画やドラマに適している。ケヴィン・コスナー主演の「さよならゲーム」はマイナーリーグのロートル・キャッチャーが若い投手を育てるなかで、野球の素晴らしさが描かれた佳作。同じくコスナーの「ラブ・オブ・ザ・ゲーム」は生まれて初めて心から愛せる女性と出会った引退直前の大投手が、その女性から別れを告げられるなかで完全試合に挑む物語。

コスナーはW・P・キンセラの小説『シユールス・

スポーツお薦めの一本! 一冊!

## 『老人と海』

原作=アーネスト・ヘミングウェイ

監督=ジョン・スタージェス

主演=スペンサー・トレーシー

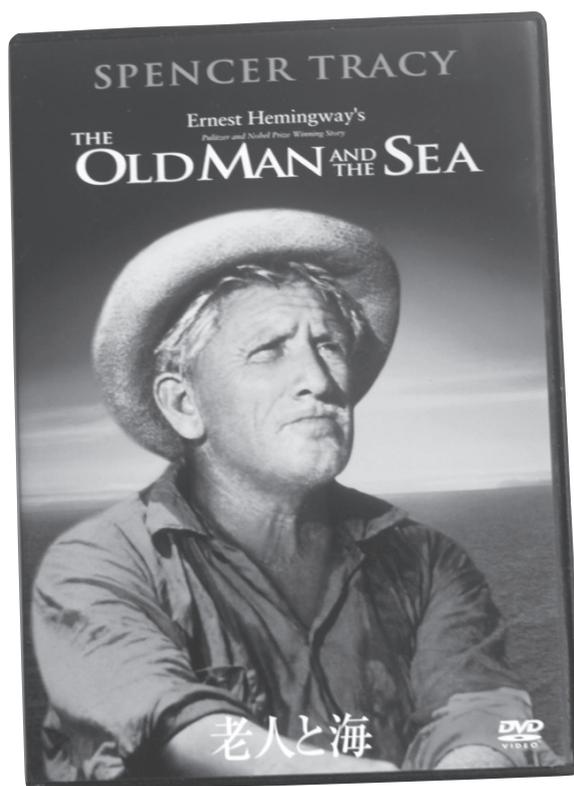
(1958年公開)

原作は福田恆存訳(新潮文庫)、小川高義訳(光文社古典新訳文庫)などで入手可能



推薦者

玉木正之



『ジョー』が原作の映画「フィールド・オブ・ドリムス」にも主演。自宅のあるアイオワの砂糖黍畑きびを潰して野球場を造ると、昔のワールドシリーズでの八百長事件で球界を追放されたジョー・ジャクソンをはじめとする8人のメジャーリーガーが現れ、さらに自分の父親も現れるという物語。

粗筋を書くと、なんとも平板な味気ない文章にしかないが、貧しいなかから必死に働いて豊かになったアメリカ中産階級の人々の間に、常に野球が存在していたことが美しく描かれ、アメリカの有名な野球作家ロジャー・カーンの言葉「野球はアメリカの父子相伝の物語である」——が思い出される。そして最後に出現した父親と、必ずしも良好な関係ではなかった息子がキャッチボールをする（理解し合う）シーンは、涙が溢れ出て止まらないシーンだ。子供の頃からリトルリーグで活躍したコスナーは、「ティン・カップ」というゴルフ映画にも出演。天才的才能を持ちながら攻撃一本槍でレッスンプロに

甘んじているゴルフファーが、一念発起して全米プロで大活躍……という面白い役柄を演じている。

スポーツ映画は（特にハリウッドの野球映画は）ハッピーエンドの大勝利か、勝てなくても爽やかな印象の残るモノが多い。戦時中に男子の多くが兵隊に取られたあとの女子野球を描いた「プリティ・リーグ」、少年野球のなかで活躍する少女を取りあげた「がんばれベアーズ」、弱小チームのインディアーズが勝ち進む「メジャーリーグ」なども理屈抜きに面白い。また実話に即したドラマも、弱小チームのアスレチックスがデータ野球で勝ち進む「マネーボール」、メジャー初の黒人選手を描いた「42」世界を変えた男」なども気持ち良く楽しめる映画だ。

日本の野球映画でも、野球によって明るく育つ終戦後の子供たちを描いた「瀬戸内少年野球団」（阿久悠原作、篠田正浩監督）、終戦直後の小倉で、エスカレートする「組の抗争」を鎮めるために行われたヤクザの対抗野球試合を面白く描いた「ダイナマ

イトとんどん」(岡本喜八監督、菅原文太主演)、謎の覆面投手が大活躍して阪神タイガースを優勝に導く「ミスター・ルーキー」(井坂聡監督、長嶋一茂主演)など、話の内容は単純でも、スポーツの楽しさや喜びが溢れ出ている映画と言えるだろう。

そんななかで戦前のバンクバーに実在した日系野球チーム朝日軍の活躍を描くなかで、戦争を迎えて敵国人となった日本人の悲劇も描いた「バンクバーの朝日」(石井裕也監督、妻木木聡主演)は、少々異色の素晴らしい野球映画と言える。

野球の本について書き始めると、それだけで与えられた紙幅を尽くしてしまうに違いないが、一冊だけ選ぶとすれば12本のアメリカ野球小説を集めたアンソロジー『12人の指名打者』(文春文庫)。J・サバー「消えたピンチ・ヒッター」、W・L・シユラム「馬が野球をやらない理由」など捧腹絶倒のうちに溢れ出る野球の素晴らしさが味わえるはずだ。そんな野球の楽しさとは対照的なのが、ボクシン

グをテーマにした映画や本だ。

マーティン・スコセッシ監督、ロバート・デ・ニロ主演で実在した世界ミドル級王者ジェイク・ラモッタの生涯を描いた「レイジング・ブル」は、打たれても前に出るブルファイターが主人公。その無骨な試合展開と同様の不器用な人生で、引退後はバーを経営したりコメディ芸人になったり、未成年の少女をバーの客に斡旋した罪で刑務所に入ったり。デ・ニロはその物悲しい人生を見事に演じた。

素晴らしいボクシング映画は目白押しで、ラモッタと同世代のミドル級王者で、ブルファイターとして破天荒な人生を生きたロッキー・グラジアノの生涯をポール・ニューマン主演で描いた「傷だらけの栄光」(監督は「ウエストサイド物語」や「サウンド・オブ・ミュージック」も手掛けた巨匠ロバート・ワイズ)、クリント・イーストウッドが監督・主演し、女子ボクシングの世界を題材に、家庭と宗教と安楽死の問題を問いかけた「ミリオンダラー・ベイビ

ー」、マイケル・マン監督、ウィル・スミス主演で、黒人差別と闘い反ベトナム戦争を訴えた世界王者モハメド・アリの生涯を描いた「ALI アリ」、同じ内容をアリ自身の主演で映画化した「モハメド・アリ ザ・グレイテスト1964-74」。

ハンフリー・ボガート主演でマフィアに操られて世界王者となったイタリア移民の大男の悲劇を描いた「殴られる者」は、最後のシーンで主役のスポーツ記者が「ボクシングは国の法律で禁止されるべき」とタイプを打つ。が、ボクシング・ファンで、裏社会のあり方を非難していた原作者のB・シユルバーグは、この幕切れを大いに非難したという。

彼の脚本でエリア・カザン監督、マーロン・ブランド主演の「波止場」や、ルキーノ・ヴィスコンティ監督、アラン・ドロン主演の「若者のすべて」では、元ボクサーの実直な青年が、マフィアなどの裏社会と闘ったり、社会の不条理に苦しみ悩む様子が描かれている。そのとき元ボクサーという経歴（ル

ールに則って力を発揮する青年）が、映画の「核」になっているのだ。

大人気を博したS・スタローン主演の「ロッキー」は、真面目な無骨者が成り上がる単純な筋書ながら、「ロッキー4／炎の友情」ではソ連（現ロシア）の王者と闘い、ボクシングが政治的な背景のなかで生まれ育ったスポーツであることを描いてみせた。他にも愛する子供のために復活しようとしてリング上で亡くなってしまいう元王者を描いた「チャンプ」（フランコ・ゼツファイレッツリ監督、ジョン・ボイト主演）や、「浪花のロッキー」と呼ばれた人気ボクサー赤井英和が、復帰戦で脳挫傷の重傷を負ってしまう自伝を自ら演じた「どついたるねん」（阪本順治監督）も、素晴らしい映画だった。

世界ライト・ヘビー級王者で、モハメド・アリのスパarringsパートナーを務めたホセ・トーレスのドキュメンタリー映画「ホゼー・トレス」（勅使河原宏監督）もボクシングというスポーツを考えるう

えで極めて興味深い作品だった。「インテリ・ボクサー」とも呼ばれたトールレスは、モハメド・アリを描いた『カシアス・クレイ』（和田俊訳・朝日新聞社）やマイク・タイソンを描いた『ビッグファイト、ビッグマネー マイク・タイソン 《拳の告白》』（山際淳司訳・竹書房）など、自ら見事な著作も残している。……と、ここまで書いて、与えられた誌面がなくなりそうになった。まだモーター・スポーツや自転車競技、オリンピックや格闘技や武道に関する映画や本、バスケットボールも忘れて……が、もう遅い。それらは別の機会に譲るとして、ならば、オススメの本一冊と、映画一本を、どーするか。

こうなりや誰にも文句の言われない（もちろん自分も納得づくの）、どんな作品とも較べられない、比較を超越した凄い作品を選ぶしかない。それが「スポーツ本」や「スポーツ映画」と呼んで良いのかどうか、と訝（いぶか）る人もいるだろうし、だから小生も少々躊躇（ちゅうちゆ）したのだが、いや、それらは紛れもないス

ポーツというジャンルの大傑作と言うべきなのだ。

その作品とは、まずは鈴木隆『けんかえれじい』（岩波現代文庫）。主人公は戦前の蛮カラ学生 of 南部麒六。若者らしい焦燥感（彼自身の言葉で言えば「満身創痍感」）に満たされていた彼は、毎日を喧嘩に明け暮れ、礫（つぶて）の投げ方、陣地の作り方などの研究に余念がなく、岡山の旧制中学を放校処分。会津の高校へ進んでも喧嘩の毎日を過ごす、やがて太平洋戦争が始まり、早大に進学したあとB25の爆撃に遭遇。そこでさらに喧嘩の血を沸き立たせた青年麒六は生涯最大の「米英との喧嘩」に挑むべく帝国陸軍に入隊。しかし喧嘩（戦争）どころか、そこにあったのは、不条理な軍隊規則や上官の命令。さらに飢えと病気。自ら病気に倒れた麒六に向かつて、唯一信頼できる上官は「俺もお前も、所詮はまあ模糊（えれじい）とした悲歌街道（えれじい）を行くものよ」と言う。その言葉を胸に麒六は中国大陸の真つ只中で軍隊から消える。痛快な青春小説が、最後は強烈な反戦小説へ。喧

嘩という肌感覚で生きていた男の感性は、肉体感覚で生きるアスリートに通じるものがあるはずだ。この小説は鈴木清順監督で映画化もされ、麒六（高橋英樹）と道子（浅野順子）の恋愛感情なども面白いが、上京する時点で終わるのが（そのとき駅の待合室に北一輝が登場するのだが）少々残念だ。

映画は、アーネスト・ヘミングウェイ原作、ジョン・スタージェス監督、スペンサー・トレシー主演「老人と海」を選びたい。小舟に乗った一人の老漁師が、カリブ海で巨大なカジキと大格闘。綱の先の餌に食らいついたカジキは老人を引き倒す。顔面から出血した老人は、筋肉に食い込む背中の綱の痛みにも耐え、両腕と手を痺しびらせながらも闘う。「ヤツがどんなに立派で素晴らしくても殺す。人間がどんなことをできるか、ヤツにわからせてやる」

死闘は二昼夜も続き、それに勝利した老人は、カジキを銜もりで刺し殺し、小舟に結わいつける。が、鯨の群れに襲われ、再び大格闘となるが、カジキは骨

を残すだけで全部食われてしまう。疲れ切つて帰港した老人は、ひとり呟く。「負けてしまえば気楽なもの。こんなに気楽だとは思わなかった。しかし、さて何に負けたのか？」そして老人はベッドに入り、眠りにつきライオン（強さの象徴？）の夢を見る。

私は、この小説の凄さが長年わからなかった。老人がカジキと格闘して、鯨と格闘して、だから何なのだ？ カジキはライバル？ 鯨は悪人？（不条理な社会？）いろいろ考えられるだろうが、この小説は身体感覚がすべてのハードボイルド小説で、スポーツを「身体を用いた挑戦」と考えるなら、ヘミングウェイはこの小説で、スポーツの（一瞬の）栄光と挫折（清々しいとも言える敗北）のすべてを描いたのだ（と私は考えたい）。映画は、ヘミングウェイ自身も製作に協力したという。

鈴木隆やヘミングウェイには、こんな凄い作品をこの世に残してくれてありがとうございます、と感謝して頭を下げるほかないですね。

# 夢劇場『馬』

No.20



## 美声の奇跡

かなり前のことだが、福島競馬場のパドックで、妙に目が合った馬がいた。新聞も見ないで馬番だけで馬券を買ったら、単勝万馬券になった。

レース後に驚いて、あちこちの新聞を参照すると、まったく人気のない馬だったことが分かった。周囲の競馬記者からは「なんで、あんな馬を買ったの?」と不思議がられた。

後日、その馬に騎乗していたS騎手に会ったので「どうして走ったのですか?」と取材すると、Sは首を左右に振った。

「まったく不明なんだ。調教はそこそこ走るけど、いつもレースではまるで根性がない。競争が性に合わないのか上の空みたいになって、周りに馬が

来ると『お先にどうぞ』と道を譲るような性格なんだ。ところがあの日、4コーナーを回ったら、クラシック歌手のような良い声が、あの馬の名前を連呼したんだ」

——テノールですか?

「そうそう、良い声でよく聞こえたのよ」

——そうしたら?

「なぜか俺の馬は直線に向いたら大外を回って、ずんずん行って、ゴール前で差した。あんなの騎手を20年以上やっているけど初めて。あの馬が勝手に走って、勝手に勝ったんだ。俺はムチ一本入れていないのよ」

観客は馬を必死で見ているが、馬もお客様の発する声を必死で聞いているのかもしれない。

現在、コロナ禍のため競馬は無観客でのレースが続いている。

この状況を馬自身はどう感じているのか? 静かで集中しやすいと思うのか、それとも張り合いがないと感じているのか?



## バックナンバーのご案内

バックナンバーを、直接お申し込みいただけます。ご希望の号と冊数を明記し、送料分の切手を左記にお送りください。

〒352-0011

埼玉県新座市野火止8-16-32

株式会社東美物流

『スポーツゴジラ』係

送料値上りのため45号より変更しました。

10冊まで 送料 400円

20冊まで 送料 700円

40冊まで 送料1200円

※特集の内容は本誌巻末カラーページとホームページに記載しています。

### 【ホームページ】

<http://sportsnetworkjapan.com/>

★お申し込みいただくとき『スポーツゴジラ』への感想もお書き添えいただけます。

次の秋号第48号は2020年10月

中旬刊行を予定しています。ご期待ください。

また、バックナンバーは品切表示の号も左記の図書館でお読みになれます。ご利用ください。

●世田谷区八幡山・大宅壮一文庫

●世田谷区深沢・日体大世田谷キャンパス図書館

●港区広尾・東京都立中央図書館

●千代田区永田町・国立国会図書館

### 【理事】

五十嵐二葉（弁護士）／池井優（慶應義塾大学名誉教授）／伊藤順蔵（早稲田大学名誉教授）

／岡田匡令（淑徳大学名誉教授）／長田渚左

（ノンフィクション作家）／笠原一也（日本オリンピック・アカデミー名誉会長）／佐久間

昇二（ぴあ株式会社取締役）／重村一（㈱ニッ

ポン放送取締役相談役）／永井憲一（法政大

学名誉教授）／山口香（筑波大学教授）／山

口良治（京都工学院高校ラグビー部総監督）

### 【事務局】

〒359-1192

埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15

早稲田大学スポーツ科学部太田章研究室気付

皆様、ご存じでしたか？

『スポーツゴジラ』が置かれている都営地下鉄（大江戸線、浅草線、三田線、新宿線）では、ラジオのAM放送を聴くことが可能です。緊急時の情報収集などに役立ちます。

スポーツゴジラ®

2020年6月18日発行

第1巻第47号

無断転載を禁じます

企画編集 スポーツネットワークジャパン

長田渚左・川本凜太郎・阿部雄輔

波多野圭吾・西本祥子・江川卓美

平塚貴大・山内亮治・鈴木希人

制作 有限会社ナトリック

印刷・製本 図書印刷株式会社

発行 スポーツネットワークジャパン

お問い合わせは左記まで

特定非営利活動法人

スポーツネットワークジャパン

〒168-0063

杉並区和泉1-40-13-401